国立音楽大学図書館における利用者教育

User-education in Kunitachi College of Music Library

国立音楽大学図書館

長谷川 由美子*

Abstract : This paper tries to examine various attempts at user-education in Kunitachi College of Music Library, from the historical point of view. By tracing its development, we can see not only actual records of our practices but also transitions in Kunitachi College of Music Library's theory of user- education.

In the first period, user-education in the Library started in the form of single-handed trials by individual librarian. In the second period, the Library as a body began to consider this problem. Many efforts were made in the field of publicity in order to help students and lecturers understand the original purpose of library. We are now in the third period in which we have tried to re-consider the theory and practice of user-education from the original standpoint of "user-guidance"

In addition to historical survey this paper, by examining three different cases of user-education which have been observed during this year, points out some problems we have to solve in future.

はじめに

この小論は、国立音楽大学図書館における集団利用者教育の種々の試みを、歴史的にたどることによって明らかにしようとするものである。そこには実践の歴史とともに、それらを生み出してきた図書館の利用者教育に対する考え方の変遷をみることが出来る。「歴史」では、レファレンス・サービスにおける個別利用指導と新入生のオリエンテーションは除いて、授業時間内に行われるものと、図書館独自の企画で行われるものすべてに触れてある。しかし、「実施例」では、学部レベルで授業時間内に行われたものに限定した。「音楽大学」というかなり特殊な状況の中での種々の試みではあるが、そこに含まれている問題の多くは一般的なものであろう。なお、当館の集団利用者教育に対する習慣的な名称は、新入生オ

当館における利用の一般的特徴

当館は、その資料の約半数が音楽関係である。利用される資料は、半分どころか七割程が音楽関係に集中しているが、ここでは利用者としては学生を、資料としては音楽関係に限定して、利用の一般的特徴を素描してみよう。

音楽図書館が提供できる資料は、文献（書籍・雑誌）楽譜・レコードに大別される。一方、利用の観点から眺めると、音楽の研究、演奏、鑑賞の三つの側面に対して援助できる。¹⁾ 演奏には楽譜が、鑑賞にはレコードが対応するが、研究の場合は少し複雑である。文献も楽譜もレコードも、「音楽」を取りまく記録の違いである。作曲家の想念を図式化して紙に固定する楽譜、それを再生するレコード、音楽現象を文字化する文献、それにこの三リエンテーションを除いて、すべて「ガイダンス」に統一されているので、この中でも特に区別する時以外はこの名称を用いた。

* Yumiko HASEGAWA : Kunitachi College of Music Library
(昭和54年10月4日受理)

つに対する研究資料，文献類という関係が大部分の音楽研究では成り立つ，あるいは，楽譜のない社会では，鳴っている音の録音，その再生，紙に固定する楽譜化という図式になろう。この図式は研究分野によって異なるが使用する資料についての比重も研究分野によって非常に違ってくるといってよい。学生一人一人のその時々の利用が何を目標としているかによって使われる資料は異ってくるが，学生を「科」という集団としてみた場合，その「科」が何を中心としているかによって科の利用の性格が決定される。

第一は，弾く，歌う，作曲するといった「音楽する」行為そのものが大学での第一目的の学生達である。これらの学生が図書館に求めているものは，第一義的には自分達の演奏する，あるいは分析する楽曲の楽譜所蔵であり，又それらの楽曲のレコードの所蔵であろう。第二は音楽現象を研究の対象として捉えるグループで，楽理科に代表される。「研究」の複雑な資料との関係を反映して利用は多岐にわたる。第三は教育理論から実践面での応用までの幅の広さをもっている音楽教育科で，第二グループとやや似た利用傾向がみられる。「科」の性格による学生の縦割りグループと，学生個人の利用要求によって形づくられる変動可能なグループとの多重構造が，当館の利用指導を行いにくくしている面でもあるし一方，主題が音楽に限定されている点が利用指導を行いやすくしている面でもある。

ガイダンスの歴史

次の表は1972年から現在に至るまでのガイダンスの流れを図にしたものである。1から9までは授業に組み込まれたもの，10から12は図書館独自の企画によるものである。

1972～73年，当館における利用指導は，1972年に大学院生の入学ガイダンスで「文献探索法」について述べたことが最初といえる。大学院側からの要請に基づき，研究実務にあたっての種々の問題点，特に文献入手が中心であった。1973年には，楽理科の三年生に「卒論のテーマ決定に際しての文献探索法」が行われている。この時期，楽理の三年生には，教員による「音楽文献学特講」が開講されているが，ガイダンスは上記の大学院ガイダンスと同種のものであった。同じ年，教育科の教師に働きかけて，実験的に四年のゼミガイダンスがクラスだけ行われる。これが教育科の委員会にかけられ，次の年から教育科一年のガイダンス（後述）と四年のゼミガイダンス（後述）がスタートする。これらの一連の試みはすべて個人の努力によってなされたものである。

1974～78年，広報委員会と広報の概念・1974年は広報委員会がガイダンスのコントロール機関となった年である。これは2～4人で構成される主任司書直属の委員会であり，発足は1971年，館報「塔」の発行がその契機となった。そこが1974年を境にして閲覧部で作成していた利用案内や新入生オリエンテーション用の8ミリ作成と並んで，ガイダンスに関する諸業務を取りいれていく。これについては二点から説明される。まず閲覧部は，増大する利用者に対処するため，制度上の種々の改革に手をつけはじめた時期で，利用指導を取り込む余裕はなかった。もう一点は広報の概念の捉え方による。「PRとは，企業または公私の団体が従来から関係のある，または今後交渉が生じるとされる人々の理解，共感，協力をわかち，かつこれを維持しようとするための恒久的・組織的方向づけの演出作用である」²⁾これは国際PR協会の定義であるが，当時の当館の実情に合わせてみると，その対象として一方には学生が，他方には教員を含む大学

		1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
1	新入生オリエンテーション								
2	大学院ガイダンス								
3	楽理科3年卒論ガイダンス								
4	教育科1年ガイダンス								
5	教育科4年ゼミガイダンス								
6	幼児教育科2年ガイダンス								
7	幼児教育科1年ガイダンス								
8	楽理科1年ガイダンス								
9	ピアノ科ガイダンス								
10	テーマ別ガイダンス								
11	オーブンガイダンス								
12	図書館めぐり								

当局が考えられる。当時、図書館は貸出件数の量的な多さに圧迫を受けていた。量の多さは必ずしもその図書館の利用者の質の高さとは結びつかない。研究、教育のための機関とは名ばかりの「貸本屋」的機能しか図書館に見いださない利用者に対する政策の一つとして、ガイダンスが使われていた。つまりガイダンスを、「餌付け」として使い図書館本来の目的を少しでも理解できる利用者を育てることがそのねらいであった。

さて、もう一方の対象に対しては別の側面もうかがえる。この時期は、当館が一般事務系職員とは異なる図書館員独自の仕事を模索し始めた時である。「塔」が従来中心を占めていた図書館の紹介記事やエッセイを質的に高度な書誌解題シリーズへ転換していったのもその一つであるが、ガイダンスを積極的に教員へ売り込んだことも同様である。つまりガイダンス実施後の学生への効果、それを引き出す図書館員の能力を、担当教員や彼らを取りまくもろもろの環境へ印象づけることによって、そこから図書館活動への理解と協力を得ようとした。一方は利用者を、一方は教員その他を意識して始められた、このガイダンスは、量から質への利用者を育てることと、図書館員の専門性の提示という二面をもっていたが、それら対象に対して、いずれも理解と協力を得ようという点で、広報の概念に相当すると考えられた。そして閲覧部の事情とあいまって、ともかくガイダンスをコントロールする機関が誕生したのであった。

テーマ別ガイダンス・1976年は図書館独自の企画によるテーマ別ガイダンスが企画される。これは全学生を対象に、参考図書室を使って行われる。今までに取りあげられたテーマは次のとおりである。特殊なカード記載法を取る楽譜カード目録の、より詳しい説明として「声楽曲の探し方」、分類目録がなく、探索を二次資料に頼らねばならないために行われた「ピアノ連弾曲の探し方」、「管楽器の楽譜のいろいろ」、参考図書の解題の「邦楽参考図書の使い方」、二次資料を使った探索の「雑誌をうまく使うコツ」、「ある主題に関する文献探索法」、その他「留学するには一情報のあつめ方」。これらは図書館側が学生に知らせたいものや学生が興味をもてそうなものという観点で設定されたテーマである。集団利用指導を受けない学生にもガイダンスの機会を与えて、資料のより有効な利用法を知らせたいという意図からはじまった。

オープン・ガイダンス・1977年には、「オープン・ガイダンス」という奇妙な名前で、教科一年のガイダン

ス(後述)に相当するものがスタートする。教科以外

の学生にもオリエンテーション以外に図書館と図書館資料に対する全般的な把握の機会を作ろうということからはじめられた。

1978年～現在、運用部会での討議・この討議はガイダンスを「利用指導」の観点から見直す必要性和、その点から運用部の仕事として取り込んでもよいとの問題提起によって、1978年度のガイダンスが全部終了した冬から1979年の春にかけて断続的に行われた。運用部会ではこの話合いの基本的で共通な理解のために以下の4つのリポートを求めた。

第一は、各大学図書館で行われているガイダンスについての一般的把握³⁾と名古屋学院大学⁴⁾ オレゴン大学⁵⁾等の実施例、及びアメリカのガイダンスについての現状とLOEX⁶⁾等の活動とともに紹介したものである。第二はレファレンスの観点から利用指導を考えることであった。リポーターは1) PRと利用指導、2) 利用指導の目的および必要性、3) 現状分析及び当館ガイダンスの歴史について考察した。次に利用指導におけるオリエンテーションからレファレンスの場合にわけて話された。第3は、広報委員会で行った過去のガイダンスについて、その実施内容、考え方をまとめたものであった。ガイダンスは広報の大きな概念の中で考えられてきており、当館の歴史の中で起るべくして起ったことが述べられたあと、運用部へ移った時の問題点が指摘された。第4のリポートは過去から現在までの各ガイダンスについて、会議等で発言された担当者や他の館員の意見をまとめることで、3つの部分にわかれていた。1) 各ガイダンスの目的、2) ガイダンスに関するいろいろな問題点、3) 利用指導はどことが担当すべきか。

その後、これらのリポートを基に何回か討議が行われたが、内容は大きく四つに分けられる。

1 担当者だけにしか内容がつかめなかった。担当者がそれぞれ作成した資料は残る。しかし、話された内容方法、学生や教員の反応、今後改良する点が記録に残らないため、報告書のたぐいが強く求められた。

2 運用部と切り離されたところで行われていた。そのため終了後のレファレンス・ルームでのフォローはうまく関連させられないことが多かったが、この問題は、事前、事後の連絡をレファレンス担当者と密接に取ることと解消されると考えられた。

3 利用者研究はほとんど考慮されていなかった。ガイダンスの実施は館員の研修の面が年を追うごとに強く

なっていたが、一方、利用者に対してはその利用の実態を正確に把握しているかどうか、疑問であった。特にこれは「音楽する」行為が大学での目的である演奏科や作曲科向のテーマを掲げた「テーマ別ガイダンス」に対して強く指摘された。

4 広報委員会は、内容的なコントロールをする機関ではなかった。利用案内的な性格の強い教育科一年ガイダンスでは、広報委員会が充分その役割を果たしていたが主題にかかわる文献探索法が内容となっているテーマ別ガイダンスやゼミガイダンスでは、広報委員会は事務的な仕事を処理する機関にすぎなかった。特にこの問題は目的や方法がそれぞれ異なり、図書館独自の企画であるテーマ別ガイダンスよりも、内容に多少の差違はあるものの、その目的、方法が同一で、しかも授業時間内で行われるゼミガイダンスで大きな争点となった。普通2人の担当者が教師との短い打ち合わせのあと、当日の内容を決めるが、何を、どう取り上げるかについて、下敷にするものがほとんど示されない状態の中で、しかもまったく個人のレベルで当日の内容が決められていた。また、事前に、予備知識として必要なものを指示されていなかった。だから担当者によって、各ゼミガイダンスの程度はさまざまで、そこに図書館としての一貫した姿勢を打ち出すには至っていなかった。コントロール機関としては運用部やその中に含まれるレファレンス部が一般的であるが、それに対して広報委員会が担っている最大のメリットは、全館的なレベルで考えられる点である。これは内容のコントロールに対しても、人員配置にしても、多くの雑事をさばくことに対しても同様なメリットを持っている。しかし実際の広報委員会は委員が毎年変わり、ガイダンス以外にも多くの広報活動を抱えているので、事務処理に関してはメリットがあったが、最も大切だと思われる内容の把握にも、ましてやそのコントロールにも不向な機関であった。

これは必然的に、どこがコントロール機関となり得るかという問題に発展したが、以下がその結論である。ガイダンスは新入生のオリエンテーションからはじまって主題をもった文献探索法まで、一貫した流れをもつものである。それぞれの時点で、対象、内容が異なるが、その流れに対し、利用案内は広報委員会へ、利用指導は運用部へとふりわけすることは不可能である。さて、ガイダンス全体をどこが担当すべきかについては、部門間を越えた存在の広報委員会の方が全体的に考えられる立場にある。又、現在、運用部は来年(1979年)に参考図書室開

室、全面閉架へ移行という大きな課題を抱えており、ここでガイダンスを取り込む人的余裕も時間的余裕もない。したがって当面は、広報委員会のもとに、運用部、とくにレファレンス係と密接な関係を保ちながら、全ガイダンスが実施されるのが望ましい。

続く1979年は、この討議結果を取り入れて、いくつかの改正が行われている。ゼミガイダンスのために「論文作成のための資料案内」が作られた。これは不十分ながら、ゼミガイダンスの内容の均一化を目指している。次に一年教育科ガイダンスのために館員向マニュアルが作られた。又、ガイダンスの申し込みから終了までの事務的な流れが整備されて、申込書が作られ、報告書が義務づけられた。新しいガイダンスが企画され、新しい種類のガイダンスの申し込みも多かった。

図書館めぐり・これは前年度まで行われていたオープンガイダンスの反省から生れたものである。オープン・ガイダンスは、図書館側の労力のわりには人の集まりが悪かった。内容は新入生向に企画したのに集まった人々は図書館資料にある程度の知識をもっていたり、文献探索法を望んでいた。そのため①学生の都合のよい時間にあわせて②3人以上のグループに対し③グループの希望に最大限沿うテーマで行われるように変更された。

ピアノ科ガイダンス、今年の10月に予定されているはじめての試みである。テーマ別ガイダンスには、毎年、演奏科向のテーマがいくつか取りあげられているが、およそ彼らが利用したことはなかった。その原因として、今までのガイダンスは音楽の「研究」を中心とする楽理教育科の利用だけしか念頭に置かず、演奏科の実体や図書館利用の意味を無視していることが指摘された。全学生の約半分を占めるこれら演奏科の学生に対して、図書館が行いうるサービスはなにか、その突破口を開く一つとして企画されている。

その他、一年楽理科ガイダンス、大学院ガイダンスが行われている。

1979年のガイダンスに先立ち、今までの一部閉架制から参考図書室をのぞく全面閉架制へ移行した。同時に参考図書室が開室され、参考業務は、参考図書の充実とともに、情報検索と利用指導という、大学図書館の二大機能を充分に発揮すべくスタートした。参考業務の中での個別的利用指導とともに、当然集団のそれも内容の一層の充実を求められた。特にカードをひかねばならないという事実は、一連のガイダンスに大きな影響を与えた。

以上のことを概観すると次のようになる。当館のガイダンスの流れは三つの時代に分けられる。第一は1972～1973年で、個人の努力でガイダンスを教員へ売りこんだ時代である。

第二は1974～1978年で、広報委員会の誕生と現在に至るまでの継続的に行われているガイダンスによって特徴づけられる。第一期に実験的に試みられた教科関係のものは、年々申し込みが多くなり、すっかり定着する。これらが根づいていった原因の一つに、音楽教育学の分野に体系的アプローチや「文献」に注目する動きが現れはじめたことがある。実践中心の経験主義的な授業が多く行われていた教科に、理論や方法論を明確に把握しうる講義や、それらを多くの文献の中から探索させる授業形態が現れる。そして大学院時代にこれらの経験をした人々が教師として残りはじめる。一方、1970年に書かれた徳丸吉彦の論文は、⁷⁾ 音楽教育学の体系や文献探索の必要性に触れた最初だが、これに続き、文献探索法に属する論文が、1972年と1976年には斉藤博^{8) 9)} によって、1977年には広瀬鉄雄¹⁰⁾ によって書かれる。繁下和雄は1970年から「新聞雑誌論文、記事目録」¹¹⁾ を連載する。「音楽文献要旨目録」も1973年から刊行がはじまる。これら一連の新しい傾向は教科の教師達に、図書館員がガイダンスを売り込む以上に、効果的にその必要性を感じさせたといえよう。これら間接的要因の他に次のような直接的要因がある。ガイダンスの効果が教師に認められたし、それ以外にも「塔」の記事内容や参考業務の現場で図書館員の能力が認識されて、図書館員に対する信頼が生まれた。又、半ばがむしゅらに取り組んでいた成果は、個別的にはであるが、基礎資料の収集と、基本的事項の確認となって年々充実していった。

一方、広報委員会の企画したいくつかのガイダンスがある。これらはテーマ、集まる人数、時間帯等、多くの問題を含みながらも、続けようとする館全体の努力によって、授業時間で行われるものと同じ比重で扱われてきた。

この第二期に対して、反省が加えられるのが第三期である。運用部でのレポートは、「実施した」という事実のみがともすればクローズ・アップされていたことに対し、広く文献の中から基本概念や他館の例を引いて当館と比較させ、歴史的に迫ることで、現在の状況を判断する材料を与えた。それに続く討議自体は制度上の改革に積極的に取り組むまでには至らなかったが、館員の中にガイダンスに対するさまざまな問題点を意識させた。こ

の時点まで、当館のガイダンスについての討議は、実施されたものへの個別的な反省が多く、全体的な考察、理論的な把握が欠けていた。それらはたまたに指摘されることはあっても持続はされなかった。この討議自体は、不十分ながら今後の当館のガイダンスへ何らかの方向性を与えたものと評価されてよい。又、閉架制への移行は図書館員を、個別、集団の区別なく、必然的に「利用指導」へ向かわせる政策であったが、この移行の前にあった討議は、1979年の実施をひかえて大きな影響力となった。それから第二期に個々に作られていたガイダンスの基礎資料が二種類、完成している。

現在私たちが立っているこの第三期は第二期に試みられていたガイダンスのさまざまな問題点が、機が熟して表面化したこと、種類が増えたこと等、ようやく全館的にこの問題が同一レベルで考えられる下地が整った時期である。1972年にその芽をみることのできる当館のガイダンスは、約8年かかって、やっとスタート台に立ったばかりであるといえよう。

1979年の実施例

一年教科I類ガイダンス

1974年以来、毎年行われており、春の行事としてすっかり定着している。教科I類約240人を2週にわけて一回に120人を相手にする。全体説明約20分のあと、学生を10グループにわけて、一人の館員が10人前後をうけもち、開架部分、閉架部分を含めた図書館のいろいろな施設を回りながら所要所で個別的な説明を行う。一回に10人の館員を必要とする大がかりなものである。ガイダンスが申し込まれると、広報委員会は当日のローテーションを考慮にいれて人員配置をし、担当となった館員には前日、説明会が開かれる。今年度は詳細な館員向マニュアルが広報委員の手で作られた。説明のポイント、実例等も記されていてわかりやすい。館内をまわる順路はグループごとに指定されていて、グループ同士がぶつかったり、説明の声がまじらないように配慮されている。

内容は、資料構成、閉架制、カード目録、参考図書室と参考業務、館の出版物、外部図書館の利用に加えて、各施設の説明で、オリエンテーションのあと、新入生が図書館内に一步踏みこんで、図書館資料や図書館員になじみやすくすることをねらっている。学生の反応は全体に好評で、「わかりやすかった」「たくさんの本にびっくりした」「充分利用したい」「説明した人がとても親切だ

った」「試聴室が魅力的」等の反応がでるが、閉架制への不満や、横文字ばかりのカード目録への不満等も見られる。

四年教育科ゼミガイダンス

1973年以来、毎年行われている。今年度は11ゼミの中の5つのゼミから申し込みがあった。ゼミとしての大きなテーマは前年度の一月に発表される。その中で学生は個別的なテーマを6月から7月までに決定して「卒業レポート」を12月までに書きあげる。ガイダンスが行われる時期は、このテーマ決定の前後である。一つのゼミは20人前後で、ガイダンスの時間は80分である。今年度作成された「論文作成のための資料案内」は教育科のゼミテーマ全体に使えるような構成にしてあるが、どのガイダンスでも担当者は普通、そのゼミテーマと教師の希望に最大限沿うように簡便なプリントを用意したり、例として取りあげる材料を工夫したりする。

ゼミ・テーマ：「音楽能力の発達に関する研究」

5月初旬から中旬にかけて、レファレンス・カウンターへこのゼミの学生が何グループも訪ずれて、同じテーマによる文献探索法を尋ねた。これをゼミガイダンスへ切りかえてもらうことを申し入れて行われたガイダンスである。担当教師との打合わせは一回であるが、その時当日使用する資料を示して了解を得、学生一人一人のテーマを知らせてもらった。当日は「論文作成のための資料案内」の他に、このゼミテーマに焦点をあてたプリント2枚と、該当する分類表、それと二次資料説明のためのサンプルが配られた。学生は、分類で本が探せることがわかった時と、このテーマに関する記事が多く掲載されている雑誌を一点づつ説明した時に、多くの興味を示したが、二次資料の説明は、理解しにくかったようである。担当者は当日の反応を「とても熱心に聞いてくれた」と受け取っているが、その熱心さが、前知識として当然持っているはずのカード目録の説明や、直接的な雑誌解題に表れてしまって、図書館側が第一に強調したい二次資料に示されないことは今後の問題になるだろう。

一年楽理科ガイダンス

17人の楽理科一年を対象とした「音楽学演習」の時間を使って行われた。教員との打合わせは3回である。第一回目は、担当者は、教育科一年に実施したガイダンスの内容を説明し、同じでよいか尋ねたが、教師からは、音楽史の授業に必要と思われる参考文献を取り上げるよう指示があった。あらかじめ学生たちには、ガイダンスで説明される資料を使えばほぼ解決できる課題が与えら

れていたが、打合わせの時に、課題内容、目的、使用している教科書、教員の作成した「音楽史必読文献表」等の情報を得ている。これらの打合わせをもとに、担当者同士で当日の資料作りや打合わせが何度ももたれた。これに図書館でははじめてのガイダンスで、その目的、使用教材、方法等、どれを取っても今まで実施したものと同列には扱えなかった。内容は、書籍カード目録について（記述内容、排列、各種目録）音楽辞典の種類、特徴、使用法、全集、双書楽譜の探し方、譜例集、図版、主題目録、と多岐にわたっていた。説明の方法としては、「課題」とは関係ない一人の著名な作曲家を例にとり、どの資料もこの例に従って行い、それに合わせたプリントを用意した。又、「課題」解決の直接的資料である全集双書楽譜の探し方では、プリントと共に、2～3人に一冊づつ、実際の参考図書を配って実習した。

学生は非常に熱心に聴いており、ノートの取り方も必要事項をしっかりと押えている様子がかがわれたが、これには「課題」が出ていて、ガイダンス終了後、2週間程で解決するように予定が組んであったことが多分に関係している。使用した参考図書は一応回覧したが、それらが回ってくる時と説明の時間的ずれが、回覧が目的なのか、説明が目的なのかをあいまいにして、多少の混乱を招いた。又、他方面に渡る欧文の参考図書が短い時間内に紹介されたが、入学して一ヶ月半程の学生たちには少し高度であった。それぞれの資料は独立して、時間的余裕をもって説明された場合は十分に理解できるが、いくつかのカテゴリーに属するものが、一度に説明されたことに消化不良の大きな原因があった。説明の際、例を特定のものに限って行う方法自体は悪くないが、「人物」とともに「事項」を取りあげるべきだったと反省させられる。ガイダンス終了後、「課題」解決のため、参考図書室に押し寄せた学生達の質問はすべて「事項」に関するものだった。

今後に向けて

この三つは、現在当館が、学部レベルで授業時間を使って行っているガイダンスの三本の柱である。その目的内容、方法はいずれも異っているが、これらの検討は、今後解決せねばならない問題点を明らかにするだろう。

まず第一に、これらは相互の関連をもたずに、その時々目的にのみ応じて行われている。どのガイダンスも教員や学生の評判は悪くないが、それは個別のガイダンスの中だけの判断である。テキサス大学が1977年に発表

した「図書館利用者教育総合計画」は、利用者教育のもつ三つの独立した段階、ユーザー・アウェアネス (User awareness), オリエンテーション (Orientation), ビブリオグラフィック・インストラクション (Bibliographic Instruction) を平行、関連させて、最終目的を達成させようとするものであるが、この三つを当館にあてはめると、新入生のオリエンテーションはユーザー・アウェアネスに、一年教育科ガイダンスはオリエンテーションに、四年教育科ゼミガイダンスと、一年楽理科ガイダンスはビブリオグラフィック・インストラクションにあたるだろう。しかし全員に実施される新入生オリエンテーションを除き、科によって受け方は違うところか、ほとんどの学生は、集団利用指導を受けないまま、卒業していく。けれど全段階の指導を受けた学生が上手な図書館利用者になり得るか、という問に対しては、悲観的な答をせざるを得ない。教育科の学生の一部だけはこのすべてを受けているが、ゼミガイダンスでの学生の注意は、第2段階でマスターしているはずのことに集中している。この段階で一様に図書館利用への希望を述べた学生達は、実際のところ、何をどう利用したらいいのかについて明確な答を出せずにいる。このガイダンスで与えられた知識が根づいていない原因は、それが学生の実際の利用要求に転換されずに終わっているからである。ACRL Bibliographic Instruction Task Forceによって1973年に出されたビブリオグラフィック・インストラクションについてのモデル声明¹³⁾は、「第一の役割は、学生に、彼らの課題を首尾よく完成させるのに必要な技術を与えること」と述べているが、図書館利用を充分に考慮した課題の提出は、学生の利用要求を図書館資料と結びつけるための動機として最も効果的だと考えられる。そしてその課題が図書館資料のあらましを知ることができ、それらを使いこなせるように段階的に計画されていれば、与えられたテーマについて文献を集め、小論を書くことが4年よりもっと早い時点で可能であろう。このようななかば理想的な音楽での実施は、アメリカの例¹⁴⁾にみることができる。当館の場合、第2段階から第3段階への移行は、単に一段階上ったのではなく、第2段階のはじめから第3段階の終りへの跳躍となっているが、一つ一つの段階は、テキサス大学の例やACRLのモデルプラン全体でみられるように、細分される必要があるだろう。

この点である程度成功しているのは、楽理科のガイダンスである。注意深く選ばれた課題、ガイダンス、その

後の参考図書室での個別指導は「第一の役割」を果たしている。しかしこのガイダンスが一回に盛った多くの内容は、いくつかの段階に分けねばならないだろう。又、新入時に、「研究」の中の一分野に関するガイダンスをいきなり受けるこの科の学生が、「演奏」や「鑑賞」といった部分で、ごく基本的な資料を知らなかったり、カード目録がひけなかったりする事実がレファレンス担当者から指摘されている。専攻分野は別として、音楽大学の学生としての全般的なガイダンスが個別研究のためのガイダンスと並行して行われる必要がある。

総合的な利用指導がコースとして独立していなければならないかについて明確な判断は下せない。現在のところは利用と常に結びついた楽理科の一年で試みられた形が、改良され、拡大されていくのが望ましいと思われるが、そこには教員との共同作業が徹底的に考えられねばならない。

総合的な利用者教育を目ざすには、1) 音楽大学の学生としての全般的な利用と専門科目としての利用の二つに答えられ、かつ学生の発達段階に応じたカリキュラムを組むこと、2) 授業内容にあわせて、課題を伴った形で実施されること、3) 教員との共同作業で行われること、が必要であろう。

二番目は、内容に関するいくつかの点である。資料がある主題分野の中で占める位置、その必要性は、図書館員が避けて通ることのできない問題である。単に書誌事項を並べ、使い方を解説するだけで、説明する資料の価値を十分に学生に伝えることは出来ない。そこには授業内容が包みこまれる主題への深い理解と、使われる書誌の意味づけが必須の条件となる。それに加えてカリキュラムに通じていることが挙げられる。楽理科のガイダンスでの徹底した教師との打合わせは、それをある程度可能にし、教師がガイダンスに望んでいるものを完全に図書館員へ伝えている。それに反して教育科の場合は、教師が望んでいるものやカリキュラムに対する知識が図書館員には全般的に欠けている。私たちは、いわば自分たちの考えだけでゼミガイダンスを行ってきているが、図書館員が一連のガイダンスで「文献探索法」や「書誌解題」の面だけ扱うにせよ、背景にはこれらの事情が把握できていなくてはならないだろう。教師個人との徹底した打合わせとともに、教育科全体と図書館との討議が事態を少しは改善するかもしれない。教師との打合わせは程度が高すぎた楽理科の場合も同様である。図書館員側がこのガイダンスの結果や参考業務での観察を基にした

データを整えて、本当の意味での打合わせにもっていかねばならないだろう。

さらにもう一つ加えるなら、「図書館員が教えること」¹⁵⁾について、私たち自身が本質的に理解しているかどうかという問題が含まれる。

あたかも授業の付属物にとどまっている現在のガイダンスを、完全に授業の年間カリキュラムの中の一時間にしたいと真剣に願うなら、授業内容に関するこの三つの点を克服することが、これからの大きな課題となるだろう。

最後に、効果測定¹⁶⁾の問題がある。私たちは現在、これについてのしっかりした材料をもっていない。たしかに教師の意思や学生の反応は一応の材料になりうるし、取り扱われた資料、使われた方法等も図書館内で、ある評価を受ける。しかし、私たちが本当に欲しい材料は、ガイダンスによって生み出されたもの、この場合は図書館資料を有効に使えるようになったが、その結果、レポートにどのような変化があらわれたか、この2点を評価することである。第一点に関しては、各種の記録、つまり貸出統計表、外部図書館閲覧願、外部機関へのコピー依頼に加えて、参考図書室での詳細な観察が材料となる。しかし残念ながら、現在のところ、雑誌、紀要類の使用が増えていること以外、目立ってこれを立証するものはない。又、参考図書室での観察は多数のため、ゆきとどいていないのが現状である。

第2点についてはさらに難しいだろう。レポートそのものはただ一回のガイダンスよりも年間を通じての教師の指導や本人の能力に大きく左右される。とはいえ、「参考文献の扱いに変化がみられるようになった」「外国文献に挑戦する人もでてきた」という教師の評価に対して、形になったレポート自体は、私たちの目にふれることはない。特に教育科の卒業レポートについては、他の学科同様、図書館に保管される形を望みたい。

ただ効果測定に関しては教員の協力を得て、一つのガイダンスが実験的に試みられようとしている。あるレポートの前に、ガイダンスを実施するグループとしないグループをわけて、効果を参考文献、引用文献の取り扱いに限って観察しようとするものである。

以上についてまとめてみると、今後のガイダンスを考えるにあたっては、1) 総合的な利用者教育計画が必要なこと、2) 主題知識、方法論ともに教師としての図書館員が必要なこと、3) ガイダンス全般に渡る効果測定が考えられねばならないこと、4) これらを実施するた

めに、館内では専門の委員会を作り、5) 教員との協力を押し進めること、である。

1972年から始ったガイダンスは館員のたゆまぬ努力によって、現在多くの種類が行われており、少しずつ定着の傾向をみせはじめている。しかしこれを完全に図書館の方針の一つとして理解してもらい、そこから成果を上げるためには、発生している多くの問題を実践の場で、地道に一つづつ解決してゆくことと、利用指導そのものに対する理解を教員と全館員がもっていることが必要であらう。

参考文献

- 1) Bartlett, Clifford: Research, performance and listening. Library Association Record, 12: 627, 1978. [伊藤陽子訳 塔19: 29—30, 1979]
- 2) 井出翁: 広報活動(P R) 概論, 薬学図書館 13(4): 129—134, 1968.
- 3) 閲覧奉仕分科会: 大学図書館における新入生オリエンテーション及びガイダンスのあり方・私立大学図書館協会会報, 70: 48—83, 1978.
- 4) 小野真理子: 学生に対する利用指導—オリエンテーション・文献検索ガイダンスを中心にして— 館灯 16: 16—25, 1977.
- 5) 外山良子: 大学図書館利用法講座, Library 127: University of Oregon. 現代の図書館 16(3): 115—130, 1978.
- 6) ウィリアム・みつ子: 米大学図書館における利用指導活動の発展, 現代の図書館 16(3): 111—114, 1978.
- 7) 徳丸吉彦: 音楽教育学研究ノート, 1—10. 音楽教育研究13(4)~14(3), 1970—71.
- 8) 斉藤博: 音楽教育文献の探索法 I, 音楽教育学 2: 82—97, 1972.
- 9) 斉藤博: 音楽教育研究入門—文献探索法を中心に, 音楽教育研究 19(1): 127—137, 19(2): 142—151, 1976.
- 10) 広瀬鉄雄: 音楽教育研究必読文献解題 その1 文献研究について 音楽教育研究 20(2): 183—187, 1977.
- 11) 繁下和雄: 新聞雑誌論文, 記事目録, 音楽教育研究 13(2)—19(2), 1971—1976.
- 12) 洪川雅俊: 大学図書館利用者研究序説「テキサス大学図書館利用者教育総合計画」を中心として, Lib

- rary and Information Science 16: 235—251, 1978.
- 13) Toward guidelines for bibliographic instruction in academic libraries. College and Research Libraries News 5: 137—139, 169—171, 1975.
- 14) Jennerich, E. Z. & Smith, B. H. : A Bibliographic instruction program in music. College and Research Libraries. 40(3) : 226—233, 1979.
- 15) この問題についての示唆に富む鋭い指摘は次の文献を参照
- Smalley, T. N. : Bibliographic instruction in academic libraries : Questioning some assumptions. The Journal of Academic Librarianship. 3(5) : 280—283, 1977.
- 16) この問題については次の文献を参照のこと
- Fjallbrant, N : Evaluation in a user education programme. Journal of Librarianship. 9(2) : 83—95, 1977.
- Brewer, J. G & Hills, P. J. : Evaluation of reader instruction. Libra. 26(1) : 55—66, 1976.